

# 探究のプロセスの充実を軸とした総合的な学習の時間における授業改善

高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース  
篠原 裕之

実習責任教員 泰山 裕  
実習指導教員 久我 直人

キーワード：総合的な学習の時間、探究のプロセス、授業改善

## 1. 問題意識の所在

目まぐるしい社会の変化の中で求められる能力の共通点について、奈須（2017）は「どの変化もが共通に不要としているのは、『何を知っているのか』に対応する要素的な知識・技能の単なる所有や習熟であり、共通に求めているのは、『どのような問題解決を現に成し遂げるか』を支える資質・能力なのです。」と述べている。これは「児童に何かを教えることで個別の知識を身につけさせる時代」から、「児童を、未知の課題が山積みの社会を生き抜く問題解決者に育てる時代」へ変化している事を意味していると考えた。未知の課題に出会った時に、様々な知識を活用して問題を解決する力の育成について田村（2015）は総合的な学習の時間から学ぶことの重要性を述べている。だが、総合的な学習の時間には、「探究のプロセスのより一層の充実」「総合的な学習の時間で育てたい力の明確化」といったような全国的課題があることが中央教育審議会の答申において指摘された。また、筆者のこれまでの総合的な学習の時間の実践や置籍校の現状を振り返ると、「探究のプロセスの充実が不十分である」ことや「総合的な学習の時間でどのような力を育てようとしているのか、どのような力が育ったのかが明確でない」といったような全国的課題と共通する課題が明らかとなった。これらを踏まえ、総合的な学習の時間の授業改善に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

- (1) 探究のプロセスの充実を軸とし、総合的な学習の時間の授業改善に取り組む。
- (2) 目的1に基づいて授業を行い、その結果児童が身につけた資質・能力を明らかにする。

## 3. 目的へのアプローチ

目的1「探究のプロセスの充実を軸とし、総合的な学習の時間の授業改善に取り組む。」ために、探究の各プロセスで留意すべき点を新小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（以下、解説）より抜粋し、筆者なりに整理して実践に取り組んだ。

目的2「目的1に基づいて授業を行い、その結果児童が身につけた資質・能力を明らかにする。」ために、解説に示された要素の相互の関係図(図1)を置籍校の実態に合わせて整理して、育てたい資質・能力を明確にした(図2)。

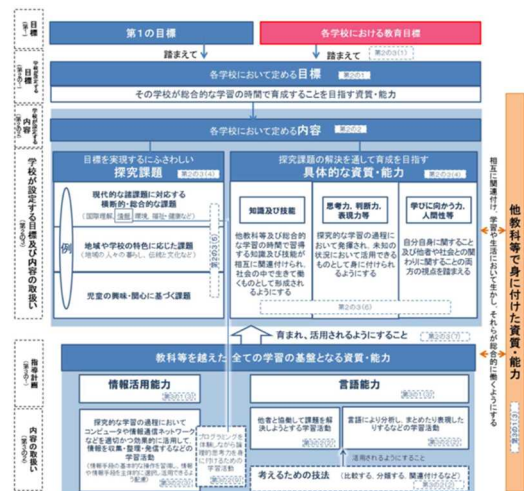


図1 解説に示された各規定の相互の関係図

探究課題を解決することを通して育成する具体的な資質・能力		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>(獲得をねらう個別知識の一例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大野地域の特産品である大野豆の歴史と、種の保存の観点における大野豆の価値について知る。</li> <li>・大野豆を守ろうとする人々の存在や、地域の特徴について理解する。</li> <li>・大野豆や大豆の生長に関する条件や、種まき収穫のやり方。</li> <li>・(獲得をねらう概念的知識)</li> <li>・同じ農作物の栽培であっても、栽培経験が人によって様々であるため、栽培方法が異なることがある。(多様性)</li> <li>・地域と学校は、互いの良さを活かしながら関わりあっている。</li> <li>・大野豆プロジェクトの方々の努力によって、大野豆(園長長さや)という種は守られている。(相互性)</li> <li>・地域の農作物同様、国産の農作物は、海外からの輸入増加に伴い、その生産量を減らしている。そのほかにも自然環境の変化など様々な要因により、地域の生産物が大きく変化することがある(有限性)</li> <li>・情報を比較・分類するなど、探究の過程に応じた考えるための技法を身につける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の課題や地域の方の思いを踏まえて課題を設定し、課題解決の手段を考え、解決の見通しを持って追求する。</li> <li>・いくつかの情報収集方法の中から、より自らの課題解決に役立つ情報収集方法を選択する。</li> <li>・大野豆のことを伝えるために必要な情報を適切に選択し、表現物にまとめる。</li> <li>・相手意識をもち、相手に合わせた適切な表現を用いてまとめることができる。</li> <li>・自らの学習について、根拠を持って振り返ることができる。また、次への目標について具体的な方策を考えることができる。</li> <li>・それぞれの発信方法の特徴を理解し、自分の伝えたいことに合う発信方法をまとめ、その理由を企画書にまとめる。</li> <li>・(具体的な教科横断的学び)</li> <li>・理科で学んだ植物の特性を踏まえ、大野豆の特徴や大豆の特徴についてまとめる。</li> <li>・家庭科の学習を活かし、大野豆や大豆の良さを生かすレシピを作る。</li> <li>・国語の学習を活かし学んだことを新聞にまとめ、表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異なる考えを持つ相手を認め、理解しようとする。</li> <li>・学習の過程において、自らの取り組みを見つめ直す。</li> <li>・より高次の、新しい課題を見つけ取り組もうとする。</li> <li>・大野地域の一員である自覚をもち、伝統や文化の継承、社会との繋がりについて考える。</li> <li>・自分の伝えたいことを発信するのにふさわしい発信方法を選択し、理由づけ、手順を明らかにし、実現に向けて活動する。</li> </ul>

図2 育てたい資質・能力

#### 4. 検証方法

本実践研究の成果の評価を、目的に沿って主に2つの方法で行うこととした。一つ目は、アセスメントの実施及び分析である。アセスメントの結果を分析して、目的1「探究のプロセスの充実を軸とした、総合的な学習の時間の授業改善に取り組む。」の考察を行う。筆者は、探究のプロセスの充実を軸として授業改善を行い、探究のプロセスの充実が実現したかどうかを見童のアセスメントの回答を基に考察する。アセスメントの内容については、全国学力・学習状況調査の質問紙を参考に、総合的な学習の時間に関わりのありそうな項目を筆者が抜粋して作成した。「当てはまる、どちらかといえば当てはまる、どちらかといえば当てはまらない、当てはまらない」の4件法で回答を得た。二つ目は、振り返りを実施しその振り返り内容を分析することで、目的2「目的1に基づいて授業を行い、その結果見童が身につけた資質・能力を明らかにする。」について考察を行う。ここで述べる「振り返り」とは毎授業後に、その日の授業で感じたことや反省、次時に取り組みたいことを中心に見童が自由に記述することである。この振り

返りの記述内容の変容を分析し、見童に身についたと思われる資質・能力を新小学校学習指導要領解説総則編(以下、総則編の解説)や解説で育成することを目指す資質・能力として示されている「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を基に整理した。また、その身につけたと思われる資質・能力の深まりに合わせてレベル1とレベル2に分け、1学期と2学期を比較した。深まりの判断基準としては、主に学習指導要領を基にし、筆者と実習責任教員、現職教員3名の合意のもと進めた。各判断基準は下に示す。

##### ・知識及び技能

レベル1	振り返りの記述より、個別の知識及び技能を獲得したことが分かる。
レベル2	振り返りの記述より、概念的知識の獲得をしたことが分かる。

##### ・思考力、判断力、表現力

レベル1	振り返りの記述より、課題をたてたり情報を収集したり、発信するなどの探究的活動に取り組もうとしていることが読み取れる。
レベル2	振り返りの記述より、未知の状況においても、思考を働かせたり情報をまとめたりして問題解決に努めようとしていることが読み取れる。

##### ・学びに向かう力、人間性等

レベル1	振り返りに、自分自身に関すること、他者や社会との関わりに関することについての記述が見られる。
レベル2	振り返りに、自分の学習過程に関する言及や、自分は何ができて何ができていないのかといったメタ認知に関する記述が見られる。

以上のような検証方法で成果を検証することとした。

## 5. 第1期実践の具体

### (1) 課題の設定

課題の設定では主に、「これまでの知識を可視化し、新たな課題に気付かせる取組」と「より課題意識を深める体験の場の設定」の2つの取組で児童の課題意識を高め、発信の場の具体的想定を行った。

### (2) 情報の収集

主に「体験」と「インタビュー」によって大野豆に関する情報を集めた。

「体験」では収穫体験をさせてもらった。少人数のグループに1人地域の方がついてくれたため、児童に積極的に関わりながら収穫体験ができた。「インタビュー」には、グループで役割分担と、すべき質問を用意してから臨んだ。各グループにつき1名の地域の方に来てもらい、各グループ協力して地域の方にインタビューする姿が見られた。

### (3) 整理・分析

整理・分析場面では集めた育て方に関するポイントを新聞記事形式に整理することにした。集めた情報を他のグループとも照らし合わせ、自分たちが得られていない情報を補った。その後、グループで「種まき」「定植」「収穫」「お手入れ」の4つの場面を分担して記事にした。

### (4) まとめ・表現

大野豆についての紹介と1学期の自分たちの学びについて簡潔に発信し、大野豆に関する情報をまとめた新聞と大野豆の種を他校の校長先生へ手渡した。後日、発信先の小学校の児童の感想が送られた。発信先の小学校からは多くの良かった点を教えてもらうことができた。その感想を児童にフィードバックすることにより、児童は自分の取組について肯定的に捉え、達成感を得ることができた。

## 6. 第2期実践の具体

### (1) 課題の設定

1学期の課題設定と大きく違うことは、すでに児童の中には大野豆に関する課題は根付いているため、それを「どのように広げて行くのか」に焦点を絞った話し合いをした。第2期は、川風祭りという地域の祭りで、一人一人が発信したい内容と方法を選択して取り組むことになった。イメージマップを用いて「伝えたいこと」と「伝える方法」を可視化し、自らが取り組みたいことを選択し、それをもとにグループ分けをして活動に取り組んだ。

### (2) 情報の収集、整理・分析

2学期はグループに分かれて活動したため、情報の収集方法や整理・分析の姿が様々であった。ここでは2つのグループを例に挙げる。

レシピ作成グループは、主に2つの手段で情報の収集を行っていた。一つ目は、パソコン・本でソラマメの調理方法を調べ、それを大野豆に当てはめる方法だ。自らの経験を振り返ったり、様々な年代に対応できるようにしたりして、数あるレシピの中からよりたくさんの人に美味しさを知ってもらえるようにレシピの選択をしていた。二つ目は、自ら調理して美味しかったものをレシピにする方法だ。家庭科で学習した経験を生かし、自主的に料理を開発する児童の姿が見られた。集めた情報を、受け取った相手を読みやすいように整理して手順を示したり、大切なところを強調したりする工夫をしながら表現物を作っていた。

パンフレット、チラシづくりグループは主に2つの手段で情報の収集を行っていた。一つ目は、これまでの学習の振り返りである。1学期に、体験や地域の方へのインタビューで得た情報を、もう一度振り返ることで改めて情報を得

ていた。二つ目は、地域の方へのインタビューである。2学期も定期的に地域の方に授業に入っただき、その都度児童はこれまでの学習では得られなかった情報を得ていた。集めた情報を、相手意識をもちながらパンフレットやチラシにまとめることができた。

### (3) まとめ・表現

川風祭りでは、児童が自らの学びを自ら選択した方法で、多くの人に発信する姿が見られた。活動を終えた次の日の授業で振り返りを行った。振り返りに活用するために、5年団の取組に参加してくれた地域の方や保護者に向けて、PMIシートを用意して感想をもらっていた。PMIシートを活用して振り返ることで、児童は1学期同様大きな達成感を得ることができた。

## 7. 考察

目的1の成果を考察するためにアセスメントの結果を分析した。下の図は(図3)アセスメントの中でも、特に探究のプロセスに関わりの深い『総合的な学習の時間』では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。」という設問に対する回答の変容である。

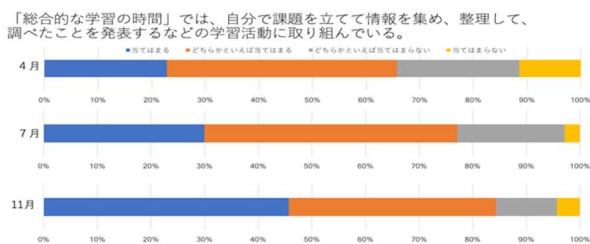


図3 アセスメント結果

4月は約66%に留まっていた肯定的回答が、7月の段階で約77%、11月には約84%にまで増加した。この結果から、筆者は探究のプロセスの充実を軸として授業改善に取り組んでいたが、児童も探究のプロセスの充実が為された総合的

な学習の時間であったと感じていると言える。

目的2の成果を評価するために児童の振り返りを分析した。まず、各資質・能力に関わる記述が何回見られたかを整理し、その結果を考察した。知識及び技能のレベル2に関わる記述は全体を通して、18回見られた。そのうち約72%にあたる13回は2学期に見られたものであった。同様に、思考力、判断力、表現力のレベル2に関わる記述は全体を通して、26回見られた。そのうち約81パーセントにあたる21回は2学期に見られたものであった。また、学びに向かう力、人間性等のレベル2に関わる記述に関しても同様の傾向が見られ、全体を通して238回あった記述のうち、約83%にあたる197回は2学期に見られたものであった。以上のように、各資質・能力について、1学期よりも2学期の方がレベル2に関する記述の回数が多かった。

また、回数による考察の他に、各児童の変容に関する考察も行った。「1学期はレベル1の記述しか確認できなかったが、2学期にレベル2の記述が確認された児童。」や反対に「1学期にレベル2の記述が確認されたが、2学期にはレベル1の記述しか確認できなかった児童。」など学期ごとの変容のパターンをまとめ、児童がどのような変容を遂げたのか整理し、その結果を1学期と2学期のレベル1の人数とレベル2の人数の比率について、 $\chi^2$ 検定(マクネマー検定)を用いて比較した。その結果、各資質・能力とも1%水準で1学期と2学期のレベル1の人数とレベル2の人数の比率に有意な差が認められ、2学期にレベル2の記述をした児童の比率が高かった。以上のような振り返りの分析結果から、育てたい資質・能力を意識して探究的な学習を繰り返すごとに、児童の学びがより深まってくと思われる。